

## 令和元年度3学期終業式校長式辞（令和2年3月19日）

おはようございます。

3月5日以来、2回目の登校日です。

今日は、新型コロナウイルス対応等についてと3月2日に実施した本校卒業式についての2点について、お話します。

1点目ですが、私たちは、今回の対応の中で、当たり前と考えている生活が、当たり前のことではないことに、改めて気づかされました。朝起きて学校へ行き、授業を受け、友人や先生と会話し、部活動をして、学校の図書館で本を読むという生活は、砲弾やミサイルが飛び交わなくとも、できなくなることがあるのです。皆さんの中に身体的、心理的に不調を感じている人がいるのではなかと心配しています。

特に、長い時間をかけ、心を込めて練習や準備に取り組んできた行事や発表会等についての中止や延期は、私たちに悲しみと喪失感をもたらしていると思います。

今後の学校としての対応や学年団、担任としての思いについては、この後担任の先生から話があります。

ここでは、校長として、皆さんに期待することを二つ述べます。

一つ目は、このようなときだからこそ、自主自律、自重互惠を基盤とした、しっかりとした生活をするということです。悲しみや喪失感を前進するためのエネルギーに変えてほしいと思っています。

二つ目は、公的な問題について、これまで以上に自らのこととして受け止め、批判的かつ建設的に考えることです。問題によっては、自分にできることを考え実行することができるかもしれません。

次に、卒業式についてです。在校生は、2年の羽原健之祐生徒会長一人が代表として出席しました。私は、参加することができなかった2年生、1年生の、卒業生に対する感謝の気持ちや管弦楽部員の心を込めたハーモニーがそこにあるように感じました。

答辞で、卒業生代表の加計道成さんは次のように述べました。

「何か物事に取り組むことは、どこか山に登ることに似ているように思われます。」登っている間は木々に視野を阻まれ、また足元に気を取られて自分はどこに向かっているのかすら分かりません。時折見えたかのように思われた頂上もすぐに木々に隠れて幻のように消えてしまいます。私たちに出来ることはただ目の前のことに注

意して高みへと登っていくことだけです。しかしいつか木々が途切れて視界が開ける時が来ます。その時初めて今まで自分が登ってきた高さが分かるのです。朝日高校での学校生活もまさにそのようなものでした。目の前のことに全力を尽くす日々。その一日一日が朝日高校が僕たちに与えてくれた素晴らしい宝物です。そして何よりも朝日高校を卒業するという今、僕たちには一つ言えることがあります。それは「この朝日高校で学びきった」ということです。それは僕たちの誇りとなり、そして僕たちの一部となって、これからの人生を支え続けてくれるでしょう。

2年生、1年生の皆さん一人ひとりが、自分を大切にし、一人ひとりの在り方で成長することを期待しています。

(県立岡山朝日高等学校 校長 竹田義宣)